

第2章 簡易ベッドで人生を見出す

—これこそまさしく恋いの狂気—

「フランク、まだ三度目だけど、もっと石炭を頂戴よ。」

私は、オレンジの炎が見える雲母シートの窓がついただるまストーブの後ろに立っていました、そのストーブは、私が30年代に育ったミネアポリスのグレイのスタッコ壁の複式の部屋の上を部分を暖めていました。

フランクは私の祖父で、母の父でした、しかし私はいつも彼をフランクと呼んでいました。それは1941-42年の冷酷な冬でした、この百年で最悪、と人々は言っていました。隣の部屋には私のメルカトール投影図法による地図—グリーンランドが北アメリカと同じサイズになっている—がフランクのベッドにあり、太平洋での戦争を追っていました。日本軍がどこでかしこでも勝利していて、私はとても怯えていました。

私の立っているところをもっと暖かくするために、私はもっと石炭を頂戴と繰り返し叫んでいました。私は腕を肩から真横に広げ、キリストのはりつけを彼の最後の7語を言いながら真似ていました。炎が十分に激しくなってこそ、9才という私の年の最大の想像力を使い、遠い昔のゴルゴタでのあの恐怖の時を模倣している気分になれたのです。

私のとても熱い左肩のすぐ後ろには、フランクの小さな寝室への入口がありました、そこはスターンの劇場用メイキャップ用具から、かつら、鼻、パテ、そして顎髭用のスピリットガム、そして、フランクによると、リトル・ビッグ・ホーンの戦いでシッティングブルによって血まみれにされたインディアンの擦り切れたポーチに至るまで、何でも入っている不思議な魅力の西洋ダンスがありました。この部屋で、フランクが「うさぎの径を作った子犬と日曜日にも

っと鳴く豚たち」のような寸劇を書いたのです。これらの寸劇は、ノースミネアポリスのローレル小学校で私が監督か主演が出来るようにと思って、私の為に書かれたものでした。

アメリカの心臓部で育ったにも関わらず一特に、ヒュバート・ハンフリーとガリソン・ケイラーの進歩的なミネソタに於いて一私の家族と私はいつも周りの人達とは少し離れていました。私達の本当の世界は、酪農業や保険屋、PTA会合、ウールワースのカウンターなどツインシティに住んでいるほとんどの人々の世界ではなかったのです。私達の世界は演劇の世界でした、そしてそれは、はっきりと明確に議論された訳ではありませんが、なんとなく幼い頃から、将来は家庭の伝統に従って役者になるのだということを、私は理解していました。

実際のところ私の家には役者としての長い伝統がありました。私の母方の祖母は、マリーあるいはメアリー・ハローラン（彼女はどちらの名前でも呼ばれていました。）は、ミネソタ、グレンコーの女優でした。フランクはグレンコー・コメディ・プレイヤーズ一座の演出家でした。（彼らが後にミネアポリスに引っ越した時、彼は舞台演出家と壁紙張り職人として生計を立てました—彼はインテリア装飾家と呼ばれることを好んでいたのですが）。曾祖父であるフランクの父、セバスチャン・ゴードルは、19世紀にフランスでコメディ・デラルテに入っていたとさえ聞いていました。

私の父、ジェラルド・ウォルター・ヴォーンは、ラジオ俳優として良く知られおり、その有名なハスキーな声で、ギャング、家畜泥棒、海賊などのタフガイ役を効果的に演じていました。

私の先祖たちは天空に輝く綺羅星のようなスターではありませんでした。彼らは仕事として役者をしていました、仕事から仕事へと渡り歩き、たとえそれがどんなに小さな、卑下するような役でもそれを理由に断ることは決してあり

ませんでした。 私がこの50年で出演した映画、テレビドラマ、ミニシリーズ、舞台、そして（そうです）ラジオ番組の膨大なリスト—これらには一握りの名画作品と幸いにも忘れ去られた作品の両方が入っていますが—それを見て振り返れば、ハリウッドのより風通しの良い上流まで比較的早く押し上げられた後でも、先祖の仕事に対するそういう姿勢を私が受け継ぎ、それを決して辞めていないという結論に、人は容易に達することでしょう。

舞台役者一家に育つということには混乱がついて回ります。私の場合は楽しい混乱でした。

私の子ども時代のほとんどは両親とはなれて暮らしていましたが、このことに憤慨した記憶はありません。そして両親が離婚した後、私が実の父に2回会っただけです。ほとんどの時間を私は祖父母によって育てられました。それでも心のどこかで、私の両親が私のことを思ってくれていると感じていました。父はニューヨークの家から毎月祖父母経由で20ドルを送ってくれていましたし、誕生日にはちゃんとカードも送ってくれました。

父は時々プレゼントも送ってくれました—時計とか、ある記念すべき時には、英国製レーシングバイクを送ってくれました。明らかに、ミネアポリスでそんなバイクを観たことのある人などいませんでした、そしてそれは、初めて学校へ持って行った日に壊されてしまいました。私がやったのではありません、私を痛い目に合わせる良い機会だと思った怒れる級友たちによってです。少年として、私は同年代の友人たちからは、私の役者っぽい態度ゆえにいつもちょっと嫌われていました。（もし、私の育ったところが、ビバリーヒルズあるいはマンハッタンなら話は違ったかもしれませんが、しかしミネアポリスのウエスト・ブロードウエーではまた別の話です。）

彼らは私のことを思いあがった嫌な奴—まあそうだったのだと私も思います—と思っていたようです。

しかし、基本的には私はどこに居ようといつも幸せでした、なぜなら私はいつも私の思い描く場所にいるように装うことが出来たからです。どういう理由

からなのかは私もわかりませんが、ほとんどはイギリスにいることを空想することにしていました。私は自分の赤のラジオ・フライヤーにエマーソンアベニューの図書館で借りたイギリスの歴史本をぎっしりと入れ、800M北のウエストブロードウェイ 1826 の家まで引っ張って帰るのです。

本はとても大きくて、10世紀から11世紀半ばまでおおよそ100年に亘って君臨したノルマン民族のウィリアム1世、2世、ヘンリー1世とステファンらの燦然たる写真がありました。エマーソン図書館との往復は小学校時代もずっと続き、ワゴンを引っ張り、すでに読んだ大きな本を新しい大きな本に入れ替え、プランタジネット家、ランカスター家、ヨーク家、そして、ついにチューダー家のヴァージン女王、エリザベスに至るまで網羅し、そして何より重要なことに、その同時代の、わたしの「憂鬱なデンマーク人」、ウィリアム・シェークスピアに辿り着いたのです。

私は図書館へ野球の一塁手のグローブとキャッチャーミットを持っていきました。私はそのとき本質的には私はかなり良いピッチャーだったので、なぜその二つを持っていたのかはわかりません。でも、毎週のエマーソン図書館への往復のときに、その二つのグローブをイギリスの歴史本を慎重に被うのに使っていました。多分地元の友人たちに本を読むようなめめしい男と思われたくなかったのでしょう—まして中世のイギリスの歴史本だなんて。

それでも役者になりたいという考えはいつも心の奥にありました。

私が、本当の劇で演じる経験がないまま10才になったとき、私は次善策はローレル小学校の4年生の仲間に私のワンマンショーを見せることであろうと決めました。私はさらにお祖父さんのフランクが何か良い題材を思いつくの待つよりも、単にワーナー・ブラザーズの映画「ヤンキー・ドワードル・ダンディ」のジョージ・M・コーハンの歌とダンスを拝借しようという結論に達しました。私はすでにアドルフ・メンジョウの三つ揃えスーツ（きつと小人が

所有していたに違いない)とニューヨークパラマウントでシナトラが有名にしたのをマネした大きな耳のたれた蝶ネクタイを地元の古着屋で手にいれていました。そして、フランクの劇場用トランクから、古い山高帽を見つけ、私の用意は整いました。

私はジミー・キャグニーが、パラダイス劇場でコーハンが何度も演じたようなおかしな、お尻をつきだした、足がこわばったような踊りのスタイルをするのを見ていました、時には午後と夕方通してずっと彼の演技を見ていました。私は大好きなノースフォス先生を、私に級友たちを楽しませるように説得しました。そしてある日私が実行したのです、踊って歌って、私の級友には衝撃と恐怖なことに、どちらもあまり上手くはできませんでした。

1943年1月までには、私は演技について知るべきことは全て知ったと思っていました(私はそのとき11才でした)、それで監督を手がけて見ようと思いました。私は題材はフランクやジョージ・M・コーハンに頼るのではなく、何か違う他のものを選ぶのが最善だとも考えました。私は愛するエマーソン図書館へ行き、「ザ・ホワイト・バード・オブ・チョールラ」という題名の劇の一シーンを選びました。それはペドロと言う「メキシコの神秘主義者」の私の主役がありました。今回は私の級友たちに私の演技の間座って見ているだけでなく、制作に参加するように強要しました。それは大成功となり、再演もされました。

当時の私の近所の遊び仲間には、隣のトム、二軒向こうのスマッティとアーネスト Jr. そして通りの向こうのサリーがいました。サリーと私は同い年で、私は彼女に「マジカルモナーク・オブ・モー」という本を上げました、その本は彼女の家族が今でも持っています。アーリーン、私より1才年上で私達の家

の隣に住んでいて、私の少年時代の殆どを通して、一緒に学校へ行く友人でした。私はいつも年上の女性に惹かれていました。

私のローレル小学校での最後の学年のときに、新しい先生がやって来ました、可愛いメアリー・シャタック先生です。彼女は大学を卒業したてで、5フィートほどの身長で10代前半のようであるかのように見えました、振り返ってみると、少なくとも20才ではあったとは思いますが。男の子たちは皆彼女を好きになりました、そして私はもし出来たなら、彼女にキスを試みようとした決心しました。ある日、私はクロークルームで彼女と二人きりになりました、そして私が行動に移そうとしたその時、彼女は何か起きそうだと感じ取り、素早く出ていきました。

何年もたった1960年代、私が有名なテレビ出演者となった時、彼女がデイトン・デパートメント・ストアチェーンに嫁いだのを知りました、そして私が宣伝活動でミネアポリスに行ったときに、彼女に電話をしました。私が名前を言って自己紹介した時、彼女はすぐに私のことを思い出しました、テレビからではなく、クロークルームの出来事でした。彼女は最初の年の終わりに教師を辞めたことを私に告げ、私達の短すぎた恋愛を復活させる機会を丁重に断りました。

1944年小学校卒業し、私は学校での劇を自分で演出し、主演したことで少々うぬぼれて、「フェイマス・プレーヤーズ」テント劇場の専属メンバーとして、母と義父のいるアイオワに向かいました。私はその劇団の主宰者であるヴィンセント・デニス氏に雇われました、彼にはジョンがその冬にシカゴで、「アンエクスpekテド・ハネームーン」という劇に出演した時に会っていました。私のその夏の仕事はいわゆる「ショウビジネスの何でも屋」でした。テントを張ったりおろしたり、ポップコーンを作ったり、マジシャンのアシスタント、チ

ヨーク・トークアーティストの助手、照明係、小道具係、そしてなによりも私にとって大事だったのが、役者として仕事をしました。

私たちはアイオワの沢山の町を訪れました。週毎に移動して、テントを取り払い、夜遅く出発し、キャンパスの上で眠りながら新しい開催地に向かうのです。私たちのレパートリーは5つありました：「ザ・ストック・レイド・アン・エッグ」、「トゥディズ・チルドレン」、「ザ・シェパード・オブ・ザ・ヒルズ」、「ハリウッド・カムズ・トゥ・ティルディアン」、そして「トビー・ゴーズ・トゥ・ワシントン」でした。

その最後の劇で、私はプロの舞台で初めて1行のセリフをもらいました。12歳の少年が出来るだけまっ直ぐと背伸びして、大きな声で「エドワード・メイソン様に電報です！」と叫びました。毎晩、私はだんだん舞台の前へ前へと出ていき、ほとんど観衆の真ん前に出てしまいそうなくらいでした。私はどうとうショービジネスの世界に入ることが出来ました、そして私の少年としての夢を実現させるのを妨げるものはもう何もなかったのです。

1944年の秋、ジョーダン中学校へ入学するにあたり、私は7年生の小さな「やつ」として、幼稚園のころからの友人たちと一緒にいるように努めました。そのころまでには、彼らは皆もう私の芝居をしたいという願望にもう慣れ切っていました。しかし、突然、私は新たな12才の集団をこれに慣れるように説得しなくてはいけない羽目になるのです。

私の最初の失敗は小学校の卒業式に着た衣装—ラクダの毛のコート、長いキーチェーン、デトロイトではやっていたスーツスーツのような服、シナトラ風蝶ネクタイで新しい学校へ行ったことです。私は歓迎されませんでした。実際これから放課後に自分自身—新しい級友の皆とはずいぶん異なる—のために文字通り、戦うことになるだろうと感じていました。まあ基本的には、たくさん奴らが私を叩きのめしたいと思っていました。早口でペラペラとまくし立てる少々のアイルランドの呪文で、私の潜在的な敵を遠ざけました。私

は全ての、いや2つを除いて殴り合いを避けることができました、うち一つは私が実際のところ勝ちました。

1944年から45年の舞台シーズンでは母と義父のジョンは「ラムシャックル・イン」という作品で巡業していました、この作品にはザス・ピッツが主演し、そしてスミスを卒業したばかりのナンシー・デイビスのちにファーストレディ、ナンシー・レーガンーが出演していました。その作品はミネアポリスのリセラム劇場で公演しました、そして私は初めて、私の母が本当の役者であること、そして私の空想でないということを信用しない学校の友人たちに、証明することができたのです。彼女が生まれた街で役を演じるという幸運が訪れました。ジョンはレギュラー出演者でしたが、母はピットの相手役の代役として雇われていました。劇団が列車でミネアポリスに到着するまでの間に、母が代役を務めるその女優さんが転び、足首を捻挫してしまい、母マルセラが故郷でザスの相手役を務めることになったのです。私の知る限り、その舞台を観にきた級友は誰一人としていませんでしたが、彼らが現れても、世界中のどれもが観てもわかるように看板に母の名前があることで安心していました。

小学校時代、ごくまれに、父の出演するラジオドラマ「ギャング・バスターズ」、「クライム・ドクター」、あるいは「FBI インピースアンドウォー」と言った番組のスケジュールが事前に分かった時は、近所の幼馴染を集めて、終わりのところの出演者をよく聞くように言いました。実際彼らは聞いてくれましたが、そのウォルター・ヴォーンが私と関係があるとは誰も信じてくれませんでした。なので、私は結果的にその作戦を諦めることにしました、私の本当の家族と俳優仲間とのショービジネスの夏の日々の、私の別の人生を証明するには、もっとまじな証拠ができるまで待たなくてはならないだろうと考えたのです。

しかし私は完全に普通の生活から切り離されていたわけではありません。それなりに友達もいましたし、いくつかのクラスでは上手くやっていましたし、誰かとスケートをしたり、世紀半ばに進む日々の中で、中西部の子どもたちが楽しむ悪ふざけにもほとんど参加していました。スポーツへの関心も高まり、高校へ入るころには、クロスカントリーチームの副キャプテンに任命されるほど足も速く、丈夫になっていました。陸上チームで半マイル（実際には880）を走り、さらに1シーズンバスケットボールもしました。

そして、私は芝居の世界だけでなく外の活動に巻き込まれていくようになります、のちの私の興味—政治の世界に接するような活動も含めてです。1945年の春（少年時代の背景に常にあった第2次世界大戦もついに終焉をむかえようとしていました）、ノースミネアポリスにあるホウィーズビアホールで私は椅子を並べる仕事をしていました。母のお気に入りの場所でもあるこのバーに、多くの市長候補がこの地元のバーに立ち寄りました、ツイン・シティを何故自分が率いていかななくてはならないのか、市長候補の人たちが演説するためです。

そのうちの一人が若かりし頃のヒュバート・ハンフリーでした。彼はいつも早くホウィーズバーに着き、椅子の並べる騒音の向こうから、「ボビー、僕の声が聞こえるかい？」と叫び、私は笑いをこらえて「聞こえるとも、ヒュバート！」と叫びかえしていました。20年後ヒュバートと私はセントポールのウィンターカーニバルでオープンカーと一緒に乗ることになるのです。彼はリンドン・ジョンソンの副大統領になり、私はテレビのナポレオン・ソロでした。

私の十代が広がりを見せる中、かなりイケてる外見であることで社会的に受け入れられてきました。それは顔が良かったからではなく、おこずかいやときどきのアルバイトでためたお金で、当時の雑誌に載っているようなカッコイイ服を買うくらいに、服に執りつかれていたからだと思います。

私のこの服に対する取りつき様は、「ナポレオン・ソロ」の日々まで治りませんでした、私は一度の撮影のために、ときは6回も7回も着替えをしなくてはならなかったのです。そう、いくら良いものでも、ありすぎればうんざりということなのです。

同じ頃、胸に厚みがでて、声も変わるにつれ、演劇意外のことが私の頭を占めるようになりました。ほとんどの健康的な若者がそうであるように、です。（「子どもは大人の父なり」とワーズワースが言ったように）。

少年から青年にいつ変わるのか？そしてその違いをどう知るのでしょう？私に関して言えば、第二次世界大戦の初期のころに、ミネアポリスの私の愛するエマーソン図書館で「イスクワイアー」に出くわしてしまった時でしょう—そのころ私の年齢は2桁になりかけていました)

その男性誌にはヴァーガとかプリティーガールとか呼ばれる、その絵を描いた才能ある芸術家の名前をとって名付けられた若い女の人の絵が特集されていました。超鮮明な色と高現実的な質感で、それらはとても立体的で、ほとんど何もきていないような感応的な女性があふれ出ていました。そのときはなぜだかわかりませんが、そういう女性のイメージ—さそのような笑顔、ふさふさとした長い髪、おどろくほど細い体、ふくよかな胸、ハイヒールをはいた長い滑らかな足—が私を暖め、幸せにしてくれました。私はもっと見たくくなりました。たまに幸運なときは部分的に服をきた女の子の写真をみることができました（裸を見るなんてことは一度も思ったことはありませんでした）。しかし、そのころ、私はこの新たな感情が、あの男性誌が意図していた「男性」であることに関連しているとうすうす気づき始めていました。

この発見に続くその夏、私はニューヨーク・シティで母と継父になりたてのジョン・ラッド・コナーと過ごしました。そのころには彼は30代前半で、私にはローレル小学校の何人かの先生のようにとても大人の人に見えました。

それは私が彼らと過ごしたニューヨーク、いつも西69丁目で過ごした多くの夏のうちの最初の夏のことでした。母とジョンが仕事に恵まれている年—長期公演の良い役で安定した仕事—は、私達は西セントラルパークにとても近いところに住みました。(特にお金のたんまり有ったあるシーズンは、西セントラルパークにマンションまで持ちました。)しかしほとんどは69丁目のコングレスホテルに滞在し:その他の時は、コロブスアベニュー近くの、69丁目の37番地や63番地にあるちょっとみすぼらしいアパートの部屋を借りていました。

(恐らく、貴方は私が名前や番号を良く覚えていることにお気づきでしょう。住所、日付、そしてそのほかの数字(形)はどうにか私にピタットくっついていくようなのです。多分それらについて私がいささか迷信的などころがあるからでしょう。例えば、私の人生におけるこんなにも沢山の重要な瞬間が、私の誕生日、11月22日に起きているという事実があるとしておきましょう。)

今日、マンハッタンのアッパーウエストサイドは、スターバックスそしてザバーのアウトレット、ブティックが服や流行りのスタイルを、パリやミラノでデビューした2ヶ月後には提供しています、そしてレストランはグルメな一団が今虜になっている異国料理—タイ、ザンビア、或いはあなたが思いつくなんでもの高価な料理を特徴としています。子供たちは、もし見かけるとすれば、乳母かスカンジナビアのフィニシングスクール卒のオペアに付き添われています。40年代のもっとリラックスした雰囲気の時には、私は誰にも付き添われないで「その公園」で朝早くから日が沈むまで遊ぶのを許されていました。

母の許可を得て、私は夕食の後もコロンバス広場近く、当時の街頭演説の地、ロンドン、ハイドパークのスピーカーズコーナーのアメリカ版のところをうろつきました。群集は、男性、女性、少年少女を含め、円になって立っていました。聞き手はしょっちゅう互いに体がぶつかり合ったりしていました、そしてそこで私は経験したのです—街角の戦時における様々タイプの政治論、共産主義から、サンディカリスト、そしてファシズムまでの興奮させる理解でき

ない雰囲気へのはじめての参加に加え、一私の初の本当の勃起。「本当」が意味するものは、性的な興奮によって起きる勃起のことで、他の人との一体一の接触によって誘発されたものです。

私は今も彼女のことを覚えています。彼女は浅黒い肌で、私くらいの背丈(私はそのころ12才くらいだったはずですが)、そして今の有名な女優のジェニファー・ロペスのような体つきでした、丸くてしっかりしたお尻。(私は形の記憶が良いって言いましたよね。)彼女はびっしりと詰まった、休みなく押し合いへしあいしている群集中で、私の前に立っていました。そしてそれは優しい、しかし突き出したお尻の何か電氣的な圧力が、私のズボンの前に加えられました、私の少年らしいお尻にしっかりと押しつけ、私の肉体的な反応を誘い出したのです。

少々やましい思いにかられ、どうしてなのか分かりませんでした。彼女の顔をはかなく、ちらりと見ました。私は熟れた唇で遊んでいるかすかな、ぼんやりとして微笑みを捉えました。振り返って見ると、あの表現を簡単に説明する事が出来ます。彼女は自分が私をからかっている事そして、私がそれに反応していることを知っていました。

ぼんやりとですが、私が経験していた身体の中の混乱が、ミネアポリスのウェストブロードウェイのパラダイス映画館で、アン・ミラーのダンスを見た時の感情と何か繋がりがあることを知っていました。後に、キャサリン・グレイソン、ヴァージニア・メイヨ、そして(最も良いのですが) ジェーン・ラッセルが私を興奮させ、熱く、同じように幸せに感じさせてくれるようになります。

もちろん、私のコロンバス広場でのその少女とのつかの間の遭遇からは何も起きませんでした。しかし、それはともかくもその事実があったから何十年も記憶に残るような、人格形成の瞬間の一つであったのです。彼女がその後どうなったのだろう、そしてもし彼女の印象が、この長い年月の間、私の心のなかに焼き付いているのを知ったらどう考えるのだろうと知りたくなります。

一方、私はこの新たな感情の奇妙な快感の意義を明らかにしようとしていました。故郷名なポリスで、私が毎週土曜日の朝に出席していた、聖アン教会のバソロメフ神父の公教要理授業の御陰で、私はこの感情が十の規則、彼が聖体と堅信の秘跡を私達に準備しているときに繰り返し言っていた、戒律と呼ぶものと何か関係があると知っていました。この新たに発見した世界の次に何が起きるのか私は正確には良く分かりませんでした。私は自分の興奮を増加させるかもしれないものであれば何にでも率直になっていました。

カトリック・リージョン・オブ・ディーセンシーは見ても良い映画のリストを出したと聞きました、大人の監視のもとか無しかどちらでも、其々の映画の道徳上の傾向と内容によってです。更に重要なことに、毎月許可されたリストの下には短いリストがあり、そこには「鑑賞禁止」と評された映画の名前が書かれていました。これは名高い指針でした。もしあれらの映画の一つを見たなら、道徳的な罪を犯したことになるのです。そして、行いの良いカトリックの少年として、それがどういう意味なのか良く知っていました：もしその大きなことから逃れることなく死んだら、煉獄にとまることなく地獄の炎に落ちていくのです。

まあ、これは刺激的な発想でした—特に気の長い悔恨の何十年もの人生が前にあるのを知っていた、普段冷静な青年期を過ごしているカトリックの少年、にとっては。ミネアポリスの繁華街のヘネピン通りのワールド映画館で、禁止されている「エクスタシー」と言う映画を公開していると伝わってきました、ヘディ・ラマーという名の女優が主演で、お尻や胸が露出させて泳いでいるところが見られると言う話でした。（この映画は1933年に製作され、作られたチェコスロバキアから大西洋を渡り、アメリカの田舎のミネアポリスにくるまで、10年以上もかかったようでした）

私の仲間たちはすぐに8番街の裏路地からワールド映画館の横のドアへの道を考案しました。

しかし、私は仲間とは行きませんでした。私は真剣においしいラマーの姿を見ると決意していました。彼らが笑ったり、悪ふざけをして、私の作戦が失敗するのを恐れ、私は自分ひとりで作戦を実行することにしました。私は映画館を見はりながら観察して、どうやら土曜日の午後であれば、切符を買う長い列ができることに気づきました、バート神父の公教要理授業の直ぐあとです。私は祖父の当時流行のポークパイスタイル（当時の流行り）の帽子をかぶり、濃いめのサングラス、自分の栗色の長い冬用のコートを着て、軍人のような格好に見えるように意識しました。この変装できっと切符を買うのに十分な年齢と判断してもらえるものとたくらんでいました。

ついに作戦実行の土曜日 came 時、中西部大きな冬のあらしのせいでヘディ作戦中止を余儀なくされました。その翌週を、次の機会がくるまでの時間を数えながら、ずっと失望のせいで熱にうなされるように過ごしました。次の土曜日、全ての条件はクリアになり、並ぶ人の数も壮大でした、そして私は前方の通路側の席にこそっと入り込みました。そのヌードシーンについてになった時、そのシーンはあっという間、かつ遠方で さらにぼかして撮影されていました、後にそれは「ぼかし」であることを学びました。だから、何も起きる一私の腰から下にもどこにも一間もなく終わってしまったのです。

私は帽子を目深にかぶり、急ぎ足で8番街の裏通りに出て、ヘネピンから北行きの電車を捕まえて、ウエストブロードウェー1826番地に帰りました。何かを見損なっただとは思いましたが、それが何なのかは分かりませんでした。

そして、私の母が20年代後半に女優としてプロデビューをした、以前シュバート劇場と呼ばれた、アルビン・バールスク・ハウスというのがありました。そして、そこで。私は（またポークパイスタイルの帽子と濃い目のサングラス姿で）豊かな胸の女性の姿、ロワ・デ・フィー、サリー・ランド、テンペスト・ストーム（後のジョン・F・ケネディの“友人”）、と当時の他の胸の豊かな女王達を見たのです。周囲の男性たちの反応—私自身のもですが—から、異性によって引きこされる不思議な力の私の理解を具体化し始めました。

私は近所の女の子たちを見廻してみました—路地の向かいのサリー、隣のドネット姉妹（ドンエトと発音していました）—そして私は果たしてその謎について全てわかることがあるのだろうか？と思いを巡らしたのです。

ジョーダン高校（中等学校とアメリカ北西部では言うのですが）では、男の子、女の子の集いが始まり、ソリに乗ったり、ヘイライド（干草用荷馬車に乗っての夜の遠出）をしたり、そして話題のほとんどはフレンチキスのことや、女の子の腰より上（この場合、私達が“テティズ（乳房）”と言っていた場所はまだ許されていませんでした）に触ることそして、そんなことがあつてたまらないけれど、恐怖のあの腰より下つまりあのふか—い秘密が隠されているスポットに触ることについてばかりでした。私達少年たちが10代前半になると、春や秋にはいろんな女の子の家のベランダに、出没するようになりました、そこで、ある女の子たちは実のところ私たちのグループの複数の男の子たちと、それぞれの家のとっても短い滞在時間の間に、キスをしたらしい、などのうわさになりました。

私の最初の十代の恋の形や顔はあまりに強烈に刷り込まれたので、今でも脳細胞に深く居残っています。私のハウスパーティー（当時は付き添いがありません）での、初めのころのお気に入りにはビビアンでしたが、彼女はひどく恐ろしいことに、高校卒業前に交通事故で亡くなりました。

次にマリー・ルーと出会い、彼女はペンアベニューで子守をして、そして私にキスをさせてくれました。唇を閉じて、皮が向けるまで。今でも、あのときマリー・ルーとはもっと先へ進めることができたかもしれない、と思います、でもバート神父の性についての説諭がいつも頭にあり、

つまさきから頭までを水平にして抱きあうことに進むことに、願わくば、最も素晴らしい言葉ができるように突破することに、恐怖感を持っていました。

私の知る限りでは、1947年私たちが中学を卒業する時に、私の仲間全員がまだこの大セックスゲームでヒットを打ったものはいませんでした。

1940年代後半に、いくつかの夏を、ニューヨークの母と継父が夏の特別公演に参加していた、ニューヨークのクラグスマアヤスカネアトレスで過ごしました。そこで、私はプロの女優たちを近くで良く観察することができました。彼女たちはいつも神秘的で真剣で、私は彼女たちに徐々に心を奪われていきました。この時には、実質的私が後に20代の時に、ハリウッドで会うであろういずれの女優たちも真剣なだけでなく、どこか他の惑星にでも住んでいるかのような自己中心的であることを知りませんでした。これは高みを目指している女優であれば、必ずしも悪いこととはではありませんが、おなじように高みを目指している男優には面白いものではありませんでした。そしてこのような自己中心的な女神を称賛し、夢中になっている十代の私にも確かに良くはなかったです。

1947年秋の中西部にもどりましょう、アル・クリストファーソンの生物学の授業をとったときのことです、私は背の高いプロポーション良い女の子に一目ぼれしました。彼女の名前はマーガレット・ルイズ・シルバートと言い、皆からペギーと呼ばれていました。

私は高校2年生で、大人の背丈にはまだなっていなかったもので、最初はこのブルネットの美人にアプローチするのをためらっていました。しかし、運命は私にとって最終的に秘密の恋に導くような特別な関係となるように彼女を選んでいたのです。

私たちはアルファベット順に机に座りました、Vaughn であることから私は教室の後ろに座り、彼女、Peggy Silbert は私の斜め前の席でした。ある日私は心の中で燃えるものを感じ、彼女の眼を捕まえて、「好きだよ」と口だけ動かして伝えました。彼女は多分これは本気だとは思わなかったのでしょうか。なぜなら、ちゃんとしたつき合いは、1949年の秋まで始らなかったからです。私たちの付き合いは、彼女のクラブ「クロバーキッズ」のパジャマパーティーに、私のいたクラブ「ゼニス」のメンバーが招待された時に始まりました。その時から1950年6月の卒業まで、私たちはずっと一緒でした。

ペギーの継父は(思い起こすと)仕事柄ミシシッピー川を往来している人で、お母さんは毎朝仕事に出かける時に、ウェストブロードウェイから1ブロック離れたところの、彼女たちの1ベッドルームのアパート空にして使えるようにしておいてくれました。何故ノース高校の無断欠席監督者が、私とペギーの二人ともが、頻繁に同じ日に休むことに気がつかなかったのかは、未だに私にとって謎として残っています。

そしてそれは、1949年の感謝祭の日でした、若者の長い間の未解決の謎が明らかにされる時がついに私に訪れたのです、いとしのペギーによって、栄光と純真さとともに、彼女のお母さんのアパートで。

その夜、彼女は私に「1949年11月20日 午後10時 全ての私の愛をこめて ペギー」として一枚の彼女の写真をくれました。私はその写真をまだ持っています、そしてペギーと私は今も良い友人です。

この青年の冒険の全ては暗い時代背景の中で起こりました。

戦争のあとの住宅不足は1948年にそのどん底に到達し、祖父のフランクと祖母は春になったら、私にとっての唯一知る我が家から移動しなくてはならないと宣告されました。フランクの心臓病は悪化し、借家を毎日探して帰ってくる彼の息遣いは、通りの向こうからでも聞こえるほどでした。彼は私にも、自分たちが住む家を見つけられるように、いつも目を光らせているようにと言いましたが、なかなか見つかりませんでした。

ついには祖母の妹、アン・ケネディーとそこご主人のジャック、私はいつもジョッキーと呼んでいましたが、私と祖母を置いてくれることとなり、フランクはノース高校近くの小さな部屋を借りることとなりました。私たちがウェストブロードウェイを去る日、よその家のゲストとしての新しい生活を始めなければならないことに、皆泣きながら市街電車に乗りました。

その後すぐに—おそらく、たった数週間だったと思います—フランクは一人で借家で亡くなりました、肉体的にも感情的にも心が壊れて、です。彼は私にとっての父親の姿そのものでした、そして、少年の私にとって彼が与え得る限りのことをしてくれました。私は彼をととても愛していました。

しかしいつも、私には演劇がありました。

40年代を通して、私がニューヨークに居る時は、いつも人気の演劇の「セカンドアクト」（一幕のあとに混雑に紛れ込んで中に入る）かどうにか割引価格の切符を手にしえ、急いで開演に間にわせて見に行くかのどちらかでした。

私はエリア・カザン演出の、マーロン・ブランドの「欲望と言う名の電車」、リー・ジェイ・コップの「サラリーマンの死」、「ディープ・アー・ザ・ルーツ」、ラルフ・ベラミーの「ステイト・オブ・ザ・ユニオン」、テネシー・ウィリアムズによる、若き日のモンゴメリー・クリフトの「ユー・タッチト・ミー」、とそのほか今は忘れてしまった数多くの作品の全てかそれらの一部分を見ました。私にとってそれはいつも「魔法のような時間」でした：観客、ほの暗くともったライト、幕が上がり下がり、ステージのセット、俳優、女優たちが語るストーリーを私は愛し、大切に思いました、たとえいつも全部理解できてなかったとしても。

1950年6月中旬—まさに20世紀の真ん中で—私はミネアポリスのノース高校を卒業しました。

5年後、ハリウッドで、50年代のちょうど真ん中、22歳の私は大学4年生で、私の最初のテレビのネットワーク番組に出演しました。その番組は「メディック」と言い、私はチャールズ・リール、アブラハム・リンカーン大統領

がある役者に撃たれてから亡くなるまでの間手当をした医者を演じました。
(メディックは結構たびたびこのような歴史的なものを取り上げていました)。
その時から今日にいたるまで、このショービジネスの世界での50年目まで、
私は「役のために扮装すること」で私が望むことがなんとか叶えられるくらいの
生活をしてきています。

ただ、成功と言う観念的なゴールにたゆまなく焦点を合わせる以外は、
基本計画があった訳ではありません。

1950年6月に起きたもうひとつの出来事は、私の将来の計画に影響を及ぼ
すものでした。6月22日 日曜日、北朝鮮が38度線を越え韓国へ侵略し
たのです。その後の戦争(治安活動とトルーマンは呼びましたが)は1953
年アイゼンハワーが選挙に勝ち停戦するまで続きました。

1950年11月22日、私の18才の誕生日に、私はドラフト制度に登録
することを要請され、共産主義者を殺すか殺されることが許されることになる
のでした。

もうひとつの意味深い出来事は1950年6月15日に起こりました。21
3ページのペーパーバック”レッド・チャンネルズ:The Report of Communist
Influence in Radio and Television”「赤軍ルート：ラジオ、テレビにおける
共産主義の影響に報告」が発行されたのです。(このタイトルが”A”ではな
く”The”であることに注目してください。) 出版社は「カウンターアタック：
共産主義との戦いの真実」、ニューヨークの42丁目西55、と確認されまし
た。その本の最後のページにこの「カウンターアタック」は、さらに「3年前
の1947年5月に元FBI捜査官たちによって設立された個人的、かつ独立し
た組織であり、いかなる政府とも関わりがない」と書かれていました。

十数年後(60年代後半)に、私はこのブラックリスト時代について博士号
論文—のちに「Only Victims」として本として出版—をかくことになります。

これにはどのようにこの「カウンターアタック」や他の組織が公的、私的にショービジネスにおける、舞台、映画、ラジオ、そして新しいメディア、テレビを含むすべてにおいて、非アメリカ的、共産主義者、左翼、ソビエト指揮下にあると噂される人達を狩りたてていったのかを詳細に述べています。

しかし、その当時はまだこのことや他の世界の政情について漫然と認識していただけです。実はもっと個人的なことで頭が一杯でした。私の父—遠くでも優しい少年時代の記憶—が私の人生から永遠に消えてしまったのです。彼は英領西インド諸島のバルバドスで1950年1月に亡くなりました。その夏、父の死後、私は父の奥さん（4番目か五番目？）マーガレット・タットに会いました。彼女は39歳でとても魅力的でした。彼女によると父は一時とてもお酒をのんでいたのですが、あまりに高くつくのでやめたのだそうです。そしてその年の秋、彼女は父の遺言について話があると呼び出しました。父は私に一万ドルを2つの軍事国債の形で残してくれていました。残りの財産、約20万ドルは、マーガレットへ残されました。

（その後もずっと私は、マーガレットとの関係維持していました。70年代前半、私が「プロテクター」の撮影でスペインに滞在しているとき、彼女もスペインにいと聞き、探し出しました。そして彼女は息子さんと一緒に撮影現場を訪ねてきてくれました。実際のところ父の死後、沢山旅行し、船長と結婚していました。後に彼女がマンハッタンに住んでいるときには、当時、私とリンダが17年住んでいたコネチカットの私の大きな家を訪ねてくれました。私が最後に彼女に会ったのは、1992年コーチハウスレストランでした。そのとき彼女は80歳代でした。）

父の死は悲しくはあったのですが、私は遺産で興奮していました。当時の私にとっては膨大な財産に思えたからです。18歳のお金に対する洞察力で、私はすぐにミネアポリスの繁華街にあるリーマンズデパート（ジャック・リーマンは私にとって親類の類だと思うのですが）で複数組みで格好良く光沢された

のワードローブを購入し、それと同時に48年式のパカードセダンを購入しました。そして、残りのお金でイーストヘネピンバーにつけの口座をつくったのです。

6月には高校を卒業し、そして舞台やラジオでの成功の道を求めて動き出しました。夏にはいつものように、ニューヨークの名高いフンガーレイクスの一つにある、スカニーテルズ劇場での、母とジョン・コナーの第2シーズン公演に加わりました。もう一度、私は舞台裏、観客席、舞台のなんでも屋ボビーでした、舞台の掃除、客席の案内、小道具を用意したり、風景を描いたり、巨大なハンドルでスイッチボードを操作し(電気のコントロール装置はまだまだ後の話です)、そして、何よりも、公演中の劇の中で小さな役を演じることでした。もし役がないときは、観客席ですべての演技を見ていました。私は良い役者さんたちがどのように演じるのかを学ぶことに取り付かれていたのです。

ウォルター・デビス夫妻はその劇場の経営者でした。私の母が継父に会った1949年のロジャーズ&ハマスタインの最初で最後の劇的なミュージカル「アレグロ」では役者さんでした。彼らにはディビッド・デビスという息子さんがいて、ニューヨークテレビで仕事をしていました。北朝鮮が南朝鮮へ侵略した一週間後、ディビッドが軍隊に再入隊させられて、ブロードウエーから7千マイルもはなれた戦地へ送られるのではないかと、ひどく取り乱していました。

このことは、彼が私に何歳なのか聞くまでは、私にとってはなんの意味ももたないことでした。私は「今度の11月で18歳になる」と答えました。

「ああ、それなら、僕たちまた一緒に仕事するかもしれないね。舞台じゃなくて一朝鮮で」

私がどういうことかと尋ねると、ディビッドがいました、「18歳になるとドラフトの対象になるんだよ」—そしてそのことを、私はその時まで良く分かっていませんでした。

私は、ミネアポリスの50,000ワットCBSラジオ系列のWCCO、で仕事が約束されていました、その仕事は私の父の友人で、以前のルームメイトであった、俳優のラルフ・ベラミーの取り計らいによるものでしたが、それを知っていたので、「聞くだけ聞いておこう、多分11月までにはこの戦争も終わるだろう」と思いました。これは私には最も思えました—日本だってドイツだって結局破ったんじゃないかと。アジアの北東のピーナッツほどの大きさもない国がアメリカの敵になるわけがない、と。

私はなんと間違っていたのでしょうか。

1950年11月1日未明、中国軍が初めて大隊で。アメリカ軍の部隊を襲撃したのです。それまでは、韓国および国連の連合軍を指揮していたマッカーサー元帥は、中国共産党は南に対して、彼らの兄弟国を援助しないであろう、とのスタンスを維持していました。今や、中国の3部隊が北朝鮮とともに戦っているという明白な証拠ができたのです。

マッカーサー元帥は、その戦争が北朝鮮と南朝鮮の対立から共産主義の強力な力と西洋の資本主義の代理戦争に変わったのだと認識することを拒み、東京に残りました。（次の代理戦争は東南アジアのヴェトナムで起きますが、まだ15年先のことです） 朝鮮戦争はそれからまだ2年続きました。

秋が訪れるころ、マギーと結婚するという形をなさない計画もありました。しかし、特にこれといった理由もなく、私たちはだんだんと離れて行きました。私はWCCOで働き始めました。ハリー・リースナー、後のCBSやABCネットワークのニュースキャスターで有名になった、彼が、中西部のアーサー・ゴドfreyのようなセドリック・アダムズの、朝のニュースライターでした。

私の仕事は一種のページボーイ的な役割でしたが、スタジオガイドやメッセンジャーが、当時着るような変なユニフォームではなく、普通の服を着ることを許されていました。

18才の誕生日がやってきて、法律によって義務づけられていたので、私はドラフトに登録しました。私のショービジネスのキャリアは、少なくともプロとしては、待たなければならいと決意しました。私はCBSに残り、ミネソタ大学のジャーナリズム専攻で、51年春季学期登録をしました。少なくとも私がすべての単位をとり、Cプラス以上の成績を維持していれば、共産主義者を撃つことも、彼らに私が撃たれることもないのです。(私は1956年12月にはドラフトで入隊しましたが、そのときにはロスアンゼルス州立大で舞台芸術において修士号を取得していました、それもまた少し後の話になります)

一方私の家庭の状況は一決して安定することなどなく一完全なる混乱に陥っていました。私の祖母と継父、前述のジョン・ラッド・コナーの両方が51年の春にそれぞれ1ヶ月も変わらずに亡くなったのです、そして母はその年の4月、ミネアポリスに傷心のまま、一文無しで戻りました。、ジョンの死は私にとっても大変なショックでした。

6月、私と母はハリウッドへ車で向かいました—私の残りの人生の中に巨大にそびえ立つであろう街を初めて垣間見るのです7。私の41年式デソト(ビジネスマンクーペ)、小さな運転席と助手席があり、ボンネットと同じ大きなと長さのトランクがある二人乗りの奇妙な車、に母の持ち物全てを、なんとか積み込んで出発しました。(私の最初の車は41年式デソトで48年式パッカードはその年の後半になるまで買っていません。)その車は、さらにヒーターシステムに故障があって、一日目のほとんどは車内温度は100度(約40度C)を容易に越えドンドン暑くなりました。私たちは故障の原因を調べに修理工場に立ち寄りました、すると修理工はラジエーターの故障が原因なので、それをとりかえなくてはならないと告げました。私たちの厳しく、限られた予算、では交換することなど不可能でした。その修理工はキャンバス地のバック

を買い、それに水をたくさん入れて、前方フェンダーにぶら下げてモジャヴ砂漠を切り抜けるようにアドバイスをしてくれました。そして私たちはそのように西へ旅を続けたのです、耐えがたく暑い日々の間じゅう、バッグの水でラジエーターを冷やし、夜は車で眠りながら、です。

一週間後私たちはなんとかラスベガスにたどり着きました、脱水症状と疲労でほとんど死にそうで、サンズホテルの前で眠りました、そして2・3日後、ついに煙や蒸気を変な形の車から出しながら、ポッポッと音を立ててロサンゼルスに到達したのです。私たちは母の古くからの女優仲間で、母がオハイオのライト・プレーヤーズと一緒に仕事をしたことのある、キャサリン・カードの家を探しました。キャサリンはエル・セントロの「ゴワー ガルチ」に住んでいて、いつか私が契約するであろうはずのコロンビアスタジオからすぐのところでした。

18時間眠ったあと、映画撮影所とはどんなものなのかコロンビアへ歩いて見に行きました。私の第一印象は未だに変わりません。今もその時も、厳重に警備をされた刑務所のように見えました：高く、日焼けした、窓のない壁で、バートン・マクレーンのようなある映画の悪役が下で何が起きているのか、悪意のある目で監視しているかのようでした。

ハリウッド大通りの安っぽいホテルや貸し部屋を転々としたあと、その大通りの北にあるウィットレイ通りの古い家の一室を夏の間借りることができました。母はオレンジジューススタンドの仕事を見つけ、私はウィルコックスの映画館で駐車場係の仕事を見つけました。私はシュワブドラグストアーを見つけたのですが、そこで、ある日、不朽の名作ビリー・ワイルダー監督の「サンセット大通り」で有名なモンゴメリー・クリフトが、そこから出て行くのを見かけたと思いました。近づいて見るとそれはモンゴメリーではなく、10年後にわかるのですが、それはクリフトをもっと大きくしたヴィンス・エドワーズ（彼のことはまたあとで）でした。そのくらい、私は映画スターを見ることに取りつかれていたようです。

母はハリウッドに残り、可能な限りの仕事を見つけようとし、一方私は秋にバスで(デソトは処分したので)大学の2年目のためにミネソタに戻りました。

私は大学でジャーナリズムを専攻していました、もし、俳優業で成功できないようならスポーツライターやコメンテーターを頼みの綱にしようと考えてのことです。しかし、51年の冬期までに、運動選手や汗臭いロッカールームに嫌気がさしました。私は演劇を専攻として登録しました。同時に KUOM—ミネソタ大学の有名なラジオ局で近隣の5州に放送をしていた—のオーディションを受け、合格しました。

芸術家きどりの学生生活、1951年秋から52年春までを通して、舞台やマイクから離れることはありませんでしたが、女の子たちについては結構後回しの状態でした—つだけの例外を除いて。51年から52年の冬休みの間のことですが、母が休みの間、西へ来るように言ってくれました。このときは長距離ドライブをせずにパッカードをカバーで覆い、ハリウッド大通りから北へ1ブロック半外れたところの、ノース・チェロキー1830番地のアパートメント102の母のところへ行くために、グレイハウンドバスでL.A.に向いました。(もしあなたが、ハリウッド大通りとチェロキー通りの交差点の北西の角に立つことがあったら、足元を見てみてください。そこには1998年にハリウッド・ウォーク・オブ・フェイムに加えられた私の星があるはずです。)

母と私は小さな部屋を共有しました、毎晩壁から簡易ベッド下ろすともっと狭くなりました。もっと重要なことに、母の部屋で私に会うために、当時の母のルームメイトのパティ・ウィーラーが待っていました。パティはバート・ウィーラー、有名なウィーラーとウールジーという寄席芸チームの一員、の娘さんでした。彼女はとても社交的な女性でした。色々な口説き落としした中でも取り分け、後のパラマウントスタジオを率いる、若き日のロバート・エバンズと既にベッドを共にしていました。(少なくとも、エバンズが彼の回顧録、ザ・キッズ・イン・ザ・ピクチャーで、そう言っています。)

パティは「—そうですね—よくいる経験はあまりないけど、出会いを夢見る18歳の熱心な女の子という感じでした。そして私の母は開放的なショービジネスタイプであったので、パティと私をマーフィーベッドで寝させ、母はソファで眠ることにしたのです。母はそのとき、ミネアポリス出身の友人である、ジェファーソンとラベラのホットドッグスタンドで働いていたので、パティと私は一日中自由に遊べました。そして彼女は想像力と指導力に優れた素晴らしい人でした。暫く後で、振り返ったとき、ある思いが浮かびました：「パティは所謂女子色情症の一人だったのに違いない」。彼女が居ることで、私の冬休みはこの上なく楽しく、教育的なものとなりました。（彼女がL.A.にいる間、私にセックスを教え、遊びの薬学的実験に携わる以外に何をしていたのかは、私には考えもつきません。その当時は私もあまり質問をしませんでした。ほら、言い伝えがあるでしょう、貰い物の粗を探すな。。。）

1952年の新年を40℃の中でローズボール（母の友人が私に切符をくれました）を観戦して過ごしたあと、氷点下のミネソタの冬へ戻りました。私はこのとき、大学の年度が終わったら、ハリウッドへ永久に移ろうと決心していました。

そして、そうしたのです。